

<牧会ミニ通信>No.30

2020. 11. 29.

横浜の教会を辞して、妻の86歳になる母親と同伴し、羽田から沖縄読谷村に向かったのは、2001年の4月でした。沖縄では、年寄りも標準語と「うちなーぐち」とを使い分けます。バイリンガルです。近所のオバーたちは都合の悪い話となれば沖縄方言で話し始めます。

開拓伝道とはいうものの、礼拝者は、牧師と妻と妻の母親という三人だけです。10時半に礼拝をはじめましたが、早々に終わりました。その後は、読谷村の渡久地海岸で心地よい海風に当たりながらランチをいただきました。横浜にいた時とは、なにもかもえらい違いです。

古いアメリカ住宅が伝道所です。隣のオバーと出会い挨拶を交わしました。

「あんた、どこから来たサー」、「東京からです」、「フソー、当分、口きいてあげないからさー」というではありませんか。内地から来た人間には、どこか引け目を感じるのだー、それから、「東京から来た」とは禁句になりました。「どこから来たサー」、「那覇からきました」、「なんで来たの」、「JALで来ました」と応えれば会話はスムーズとなりました。沖縄の人は、「なんで来たサー」、「いつかえるのサー」は口癖なのです。

ある時、沖縄の先輩牧師から忠告を受けました。「結城先生、あなたのことを調べているよ」というではありませんか。T牧師が東京に出張の折、身辺調査をアレコレしたらしいとのことでした。なるほど、まともな人間は沖縄には来ないのが伝統かー、島国の人、外から来る人に、これほど極端に警戒します。表向きは「会えばいちゃりばちょうでー」（会えば兄弟）と挨拶を交わしますが、沖縄に定住しようものなら、そうはいきません。しかし、住み始めて数年が経ちました。すると隣のオバーが留守の時は、冷蔵庫を開けて冬瓜やウリを入れて帰るほど、親しくなりました。日焼けしたオジーや、オバーのたくましい風貌は、一見怖そうに見えますが、裏を返せば、そこには底知れない優しさと苦勞の顔がにじみでています。沖縄大好きは、どうもここからはじまったようです。（続く）

周東のぞみキリスト教会：牧師 結城晋次